COMBAT
コンバットマガジン
Nov.,2018
No.512
11

Cover Illustration
M. Kelly(Satoshi Okada)
ⓒ WORLD PHOTO PRESS 2018
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

005 総力特集 NAM THE MOVIE! スクリーンの中のベトナム戦争

022 ベトナム戦争コンバットカメラマンストーリー 第2回デニス・ギボンズ インタビュー Part2

ベトナム戦争アクションシリーズ
028 Helicopters Ruled the Sky in Vietnam

035 月刊 THEグリーンベレー GREEN BERET AFGANISTAN PATROL 2007 文と写真／DJちゅう

040 熱いぜ! ミリタリービークル 第2回MVG 2018-ASAMA

サイゴン物語 Saigon Memories
046 Beyond Shimmering TV Screen ブラウン管の向こう側

050 LRRP アメリカルパトロール Americal Patrol 敵を捉える南十字星 by Jay Borman

054 APOCALYPSE VNREUNION 2018

シリーズ 防人の肖像 ●横田 徹
060 最後のファントム 第7航空団 301、302飛行隊

070 Militaria Roundup! WWⅡアメリカ陸軍空挺部隊 Part2

080 ニッポンの力こぶ by Masayuki Kikuchi 密着! 陸海ミサイル発射訓練リムパック2018

東京マルイ
084 MTR-16

The Equipments of the U.S. Force
088 [現用米軍装備カタログ] 番外編 平成最後のミリタリーキャンプ in 仁淀川

NEW GENERATION STYLER by fujiwara
098 インスタ系#2 instagram系装備スタイリング

106 トイガンニュース
●タナカ モデル1897トレンチ・ガンVer.2
●タナカ S&W M629 4インチ《ステンレスジュピターVer.2》
●WA M4A1 PDW《RAS バージョン》

109 WESTERN ARMS COLT MkⅣ SERIES'70 REAL STEAL Ver.

112 WESTERN ARMS BERETTA M1934 COMMERCIAL GUNBLACK Ver.

123 コラム ベトナムを遠く離れて――。文／小倉 徹

COMBAT FRONT LINE

066 5.11 東京、福生にOPEN!
068 不肖・宮嶋、米朝会談を語る――。
069 MSRT登場! PSI訓練
003 ミリタリースポッター
116 新製品てんこ盛り! COMBAT mono
121 サバゲ三等兵APS部
122 ゲームOTT「ブラック コマンド」
124 US Shooting Life!
125 兵装嗜癖
126 東京キャロル・イベント!
127 ツゲチョリ特別編 H30富士火力演習
128 PRESENT
137 CIC
142 バックナンバーリスト
143 次号予告

軍用時計からユニフォームにヘルメット、キャンティーン等の個人装備品などの軍モノを取り扱う。ただし99%がコピー品ともいわれる。
Dan Sinh Market
104 YERSIN ST., 1 Ho Chi Minh VIETNAM

ミリタリースポッター
別名「戦争市場」のヤンシン市場に国境紛争なし。米、中、露、仏に越南は新旧南北が集合する。

ベトナムがアメリカと戦っていた時代から、ヤンシン市場には軍モノの放出品、横流し品、模造品が区別なく並んでいた。アメリカ軍撤退後は、共産党主導の統制経済体制下で、全ミリタリーグッズの販売が禁止された。軍モノがないヤンシン市場は当然、衰退した。1980年代まではそうだった。そんな閑古鳥を追い払ったキーワードは「ファッションアイテム」。ふさわしい呼び名さえ付けばよい。今や天つく勢いで軍モノが山となる。

Photo/Kesaharu Imai

総力特集

スクリーンの中のベトナム戦争

NAM THE MOVIE!

ベトナム戦争ほど映画製作者の創造力を掻き立てた戦争はほかにない。
その証に戦中から今に至るまで世界中の監督たちがフィルムに焼き付けてきた。
アクション、ドラマ、コメディ、ミュージカル……果てはホラーにSFまで、
ベトナム戦争映画50選を製作国とジャンルに分けて紹介する。

●構成／狩野健一郎、編集部　●イラスト／狩野健一郎

熱いぜ！ミリタリービーグル

第2回 MVG 2018-ASAMA

晴天に恵まれた五月末の三日間にわたり北軽井沢にある旧アサマサーキットの小唄聖な敷地に於いて第２回ミリタリービーグル＆ゲーム、略してMVGが開催されました。内容は軍用車輌ミーティング＆場内走行および試乗・展示・各種戦争題材のコスプレ・リエナクメントおよびサバイバルゲーム・各種ミリタリーリビングヒストリー展示・フリーマーケット・他となってます。

これは2016年の実験開催から数えると３回目ですが正式開催としたのが2017年からなので第２回と称しているのであります。日本全国にある貴重な軍用車輌とミリタリーコレクター達が一丸となって行なう欧米式のミリタリーコラボイベントとして計画されているもので、普段は目にする事の出来ない大型軍用車や軍用テント村、多数の兵士スタイルの参加者、ゲームにリビングヒストリー等が楽しめるミリタリーマニアの為の遊園地の様な物なのです。

初年度は100名前後、昨年度が300名弱、今年が400名弱と年を追うごとに活動内容も認知されはじめて参加者も増加しているので、目標の５年越えで1000名弱の参加者となれば良いと考えており、将来はアジアにおけるWAR & PEACE SHOWとなるように頑張っております。

参加された多くの方達は、これまでに無いコレクションの活用をメインとしたイベントの楽しさに気づく人が多く、次回への参加も熱望していた。

「メインイベント」

イベント内では目玉となる展示などを毎年計画しており、昨年がM3ハーフトラックの試乗展示並びに第二次大戦の米軍野戦食堂の再現がおこなわれ、戦時中のレシピどおりに再現されたレーションの配食は参加者達に喜ばれました。

本年度は2/3サイズで再現されたVN戦米軍の代表的兵員輸送装甲車でありますM113APCの展示と第二次大戦各軍の塹壕生活再現が行なわれ、見学者たちに大好評を得ました。

MVGは地元観光協会の方々も興味をもたれた様で、次回から社会見学の一環として子供たちの見学会を初めとする各種後援も考えられるかもしれないとの事で主催と致しましてはミリタリーイベントが社会的に認知されることになれば、これ以上の幸せは無いと思えます。

今回のリビングヒストリー「各国歩兵科掩体展示～ざんごーExpo'18」について

主催：戦史研究クラブ『赤侍』/ReenactmentGroup『BCo/100Bn』今回上記リエナクター有志主催による掩体展なる物が開催されましたので少し居説明させていただきます。

掩体（塹壕）とは？

第一次大戦からの近代戦においては火気の威力が増した事から兵士達は戦場で常に身を隠す必要に迫られました。

戦場において、身を隠す為に兵士達が自ら地面に穴を掘って作るものを掩体と呼び、また古くから戦場で用いられた溝である塹壕とも併せて呼ばれます。これら掩体は兵士にとって基本中の基本であり、第二次大戦における各国の将兵は無数の掩体を構築する事となりました。

今回はソビエト労農赤軍リエナクターで構成される戦史研究クラブ『赤侍』の呼びかけで、日本中からWW２主要各国のリエナクター、23名が集結し、それぞれの陣営の戦時中または開戦直前の教範、マニュアルに則っての小銃兵用掩体が掘られ、展示いたしました。

この「ざんごーExpo'18」はWW２当時の兵士が必ず一度は掘り、また多くの兵士がそこで戦い、生活を行ないながら明日の命を憂い、故郷を想ったであろう掩体を実際に掘って掘る方も体験、見る方も体験できるまさに追体験を目的の一つとするリエナクトメントそのものでしょう。

ミニジープは人気の的で、試乗希望者の列であった。

Report/SAM MOTOJIMA
Photo/K・NUMATA
協力／K・T ARTS、日本ミリタリービーグル協会、
戦史研究クラブ「赤侍」、ReenactmentGroup「BCo/100Bn」、
群馬軍用車倶楽部、他

サイゴン物語
Saigon Memories
Beyond Shimmering TV Screen
ブラウン管の向こう側

**いろいろな「初めて」が起きたベトナム戦争には、多くのキャッチフレーズがある。
最初で最後の「リビングルームに入り込んできた戦争」だったし、初めて「テレビ中継された戦争」でもあった。
映像をテレビで流すべく、ベトナムで取材をした人びとがいたわけだが
ブラウン管の向こう側にいた人びととはどのような人物だったのだろうか。
また、彼らはベトナムの地で、どのような時間を送っていたのだろうか。
彼らが残した足跡のいくつかを当時のサイゴンの様子と重ね合わせて今のホーチミン市でたどってみた。**

文／コンバットマガジン編集部　Text/CM Editorial Staff
写真／今井今朝春、WPPコレクション　Photo/Kesaharu Imai, WPP Collection

ブラウン管に浮かび上がったベトナム戦争の映像。それらの送り手として、最初のテレビジャーナリストと呼ばれた人物にNBCのギャリック アトリーがいる。彼は、1964年半ばには早くもサイゴン入りし、腰を据えて取材を始めていた。最後はCNN記者として記憶する人が多いと思われるピーター アーネットもベトナム戦争を取材している。当時アーネットは、AP通信に属して取材活動をしていた。CBSのニュース記者には、エドワード ロスコー マローがいた。映画「グッドナイト アンド グッドラック」で描かれている彼は、アカ狩りのマッカーシィを追い詰めたことで知られている。そのマローは、ケネディ政権時代になるとUSIAの長官に就任している。皮肉にもサイゴンのレックスホテルで、毎日行なわれたブリーフィングを仕切る役に回っていたわけだ。

ベトナムでアメリカが戦争に負けたのは、「メディアのせいだ！」とする声が、時おり聞こえる。それだけ映像の力は大きかったことになる。3大テレビネットワークのNBC、CBS、ABC、に加えて、現地入りした新聞、テレビ、ニュースマガジンの従軍記者たちが記録した映像、リポートが、アメリカ人が知るベトナム戦争になった。ブラウン管に浮かび上がる映像が、アメリカが見て信じる戦争の真実と、限りなく一致するようになる。するともう「ベトナムで何が行なわれているのか」、「アメリカの息子、娘たちがベトナムにいる理由は何か」の疑問に対する答えを保留することはできなかった。

LRRP

アメリカルパトロール

Americal Patrol

敵を捉える南十字星

ベトナムでは主力部隊の目や耳となる偵察部隊が重要視された。中でも特別な装備と訓練を受けた長距離偵察部隊は任務の頭文字をとったLRRP（Long Range Reconnaissance Patrol）と呼ばれLRP、レンジャーと名称を変えながら敵を苦しめたエリート部隊。今回は第23歩兵師団、通称アメリカル師団を支えたLRRPの物語。

by Jay Borman　構成／鈴木健太郎　コーディネート／河村喜代子

アメリカル師団のSSIとG中隊スクロールの組み合わせ。第23歩兵師団がアメリカルと呼ばれる由縁は編成地のニューカレドニアにある。アメリカとニューカレドニアを合わせたアメリカルの名は第23の番号が与えられるより早く用いられ、部隊マークには南十字星があしらわれている。隣はアメリカル師団のリーコンドー章。

ヘリから降りてジャングルの中へ進むG中隊の偵察チーム。彼らの腰回りやリュックサックには水筒カバーが目立つが、良く見ると弾薬ポーチとして用いられている物があり、形も角張っている。中央の隊員が腰にラペリングロープを下げている事にも注意。

アメリカル師団リーコンドースクールでの訓練風景。ラペリングと呼ばれる降下技術の習得には降下塔だけではなくヘリコプターも使われた。

第23歩兵師団がベトナムでの活動を開始したのは1967年で、師団の主力はこの年に到着した第11、第198の２個軽歩兵旅団に66年８月からベトナムに展開していた第196軽歩兵旅団が合流する形で構成されていたのだが、師団のLRRP分遣隊はこの第196旅団が既に持っていたLRRP小隊を中核として編成が進められた。分遣隊は同年12月20日に第51歩兵E中隊（LRP）と名称を変えて正式に承認され、さらに69年２月、ベトナムのすべてのLRP部隊が第75歩兵連隊のレンジャー中隊として編入される事になると第51歩兵E中隊（LRP）は第75歩兵連隊G中隊（レンジャー）と改称した。G中隊の偵察チームは５人か６人編成で運用され、チームにはそれぞれオクラホマやオハイオといったアメリカの州にちなんだ名前が付けられていた。第23師団は独自のリーコンドースクールを持っていたのでG中隊のすべての中隊員がこのスクールで訓練を受けベトナムでゲリラ戦を行なう上でのノウハウが叩きこまれていたが、スクールの教官も同じくG中隊の先輩が務めていて、彼らの経験が活かされる仕組みになっていた事は注目すべきである。G中隊は４つの小隊に分けられ、本部小隊を除く３個の小隊は各旅団のベースキャンプに割り当てられて活動し、その作戦範囲はラオスへ向かう山岳地帯まで含まれる広大なものだった。

G中隊第２小隊のサインボード。部隊マークの下には“アメリカルの目と耳”というメッセージがある。第２小隊は第196軽歩兵旅団の偵察任務や各種支援を担当し、旅団と共にLZバルディーに駐屯していた。

予想外の戦果を挙げて得意気な偵察チームの隊員たち。1969年の撮影。左から２番目の隊員ジョージ・ビーチは偵察部隊の名称がLRPからG中隊へと変わる中で３期に渡るLRRP任務に従事し、2007年にはレンジャーの殿堂入りを果たした。迷彩服はタイガーストライプとERDLが混在しているが、ちょうどこの頃にERDLへの更新が行なわれていたのでベテランがタイガーストライプ姿のまま写っているという事らしい。

G中隊のメンバーがボートで移動する様子を捉えた写真。珍しい光景だが訓練ではなく、予定されていた捕虜救出作戦が実施直前に中止となった為に後方支援の船に戻ってくる所。隊員たちは迷彩服のパターンからブーニーハットの被り方まで個性が見られ、当時の軍装を知る上で大変参考になる。ボートの先頭でM60機関銃を持つ隊員の戦闘服にはサブデュードのアメリカル師団SSIとスクロール、そして軍曹のシェブロンも見える。

G中隊が用いた武器の数々。LRRPお気に入りのCAR-15や火力支援用のM60機関銃はもとより旧式のM1カービンやM3グリースガンSMGや分捕り品のAK47、さらにはサプレッサー付きのM16にソウドオフのM79グレネードランチャーというバラエティー豊かな顔ぶれである。ホーチミンサンダルを履いた足が写り込んでいるのも面白い。LZバルディーで撮られた写真。

G中隊の隊員が着用した黒いレンジャーベレーとジャングルファティーグジャケット。第75連隊のフラッシュが付いたベレーは内張りにカナダ、ドロシアニッティング社のマークが見える。ファティーグジャケットは袖口のマチが省略された最終型で、胸のネームテープ、アーミー章はサブデュードだが左肩の師団SSIとレンジャースクロールはフルカラーという後方でのフォーマルな着用を想定した仕様。空挺章や歩兵戦闘章が見られないが、戦争後期に導入された着脱式の金属製バッジを付けていたのかも知れない。このジャケットの持ち主は1971年にG中隊に所属した事が分かっており、リーコンドースクールの名簿にもその名が記載されている。

THE LAST of PHANTOM

シリーズ 防人の肖像

最後のファントム

第7航空団 301、302飛行隊

関東圏唯一の戦闘航空団が所在する航空自衛隊、百里基地。その大空を舞うのはF4EJ改、そうファントムだ。米マクドネル社が開発した名戦闘機「F4ファントムⅡ」を日本仕様に改修したF4EJの調達が始まったのは1971年。合計140機が納入され、1989年からは90機がF-4EJ改として改修された。現在は機体の老朽化に伴い順次退役しており、現役にとどまっているおよそ40機。その“最後のファントム”の運用を任せられた301飛行隊、302飛行隊の訓練に報道カメラマン、横田徹が密着。現場でファントムを支える隊員たちの熱き思いをリポートする!

Photo & Text Toru Yokota

格納庫前のエプロン（駐機場）に並んだ“ファントムⅡ”の愛称で呼ばれるF-4EJ改。こんな光景が見れるのは世界中の空軍基地でも百里基地だけだ。1971年にF-4EJが航空自衛隊に導入されて以来、40年を超えて日本の空を守り続けてきた。レーダー警戒受信機や火器管制装置、AAM-3空対空ミサイルやASM-1対艦ミサイルなど最新の兵器を搭載されたF-4EJ改が301、302飛行隊に配備されている。

しかし、301、302飛行隊は機体の老朽化に伴いF-4EJ改からステルス性能を備えたF-35Aに機種更新が予定されており2020年度までにはすべてのF-4EJ改が退役する予定となっている。

フライトコントロールをコンピューターで制御する最新鋭機に比べ、操縦が非常に難しく、パイロットの力量が如実に出てしまうF-4EJ改。その大きな特徴は２人乗りということだ。前席と後席のパイロットの信頼関係がなければ能力が充分に発揮できない。F-4EJ改がほかの戦闘機に比べて決定的に有利なのは相手を見

第301飛行隊

百里基地に所属する航空自衛隊中部航空方面隊第７航空団隷下の戦闘機部隊。部隊マークは、百里基地の近くにある筑波山名物のガマの油売りに由来するガマガエルをモチーフにしたマフラーをしたカエルで“無事に帰る”という意味もこめられている。2020年度にはF-35への機種更新と三沢基地へ移駐することが予定されている。

２人乗りなので、後席に乗ることによって人の技量を直に見て、テクニックを盗むことができる。このため、若いパイロットは、競って「上手い」といわれる先輩の後席に乗りたがるという。

細部に至るまで入念なチェックを怠らない。日々の丁寧な仕事が安全へとつながるからだ。

給油作業を行なう整備員。迅速な作業ができるのは日頃からコミュニケーションを欠かさず、団結したチームワークの賜物。

フライト前の愛機を丹念にチェックする整備員。

「東京マルイ／M4A1 MWSガスブローバック」を少しずつ買い足したパーツで3年間アップグレードした石井の愛銃。「MTR-16」が発表された時には……（涙）！

フルハウス仕様のARレースガンが「M4A1＋1.5万円」「MWS＋1万円」とは、まさに驚きのサービス価格では!?

※マイクロスコープサイトミドルマウントは物売。

●全長:837㎜
●インナーバレル長:250㎜
●重量:2,676g
●装弾数:20発
●パワーソース:フロン134aガス
●価格:75,384円

MTR-16

TOYGUN REPORT

東京マルイ

●Photo & Text by Takeo Ishii
問東京マルイ☎03-3605-3312
http://www.tokyo-marui.co.jp/

最新・最先端の3ガンマッチ用カスタムARに要求される仕様を余す所なく完璧にフィーチャーした東京マルイ／ガスブローバックM4の最新作が「MTR-16」だ。今回は発売直前のこの銃に秘められた真の実力を、マッチシューターとしての観点から検証する。なお、今回のレポートサンプルは試作品ではなく、CM読者諸兄が購入されるのと全く同じ「量産品の中の1挺」である。

3年前、取材のため訪れた東京マルイ本社の試射レンジで、発売まで2ヵ月の量産体制に入った「M4A1 MWSガスブローバック」の最終試作品を撃たせて頂いた時の衝撃は今でも鮮明だ。

重いボルトの前後動がトリガーを引く度に“ドン！ ドン！”と肩を打ち据え、ストックパイプ内のリコイルスプリングが“ビィーンン！ ビィーンン！”と頬に響くそのリアル感にも驚いたが、何よりもガスブローバックだとは信じ難い命中精度と弾道安定性に心を奪われた。20m先に吊るされた直径10㎝のリング。そのセンターに次々と吸い込まれてゆくBB弾を、筆者は夢見心地で眺めた。

その取材の帰り足にすぐさま予約したM4A1 MWSを首尾よく発売日当日にゲットして以来、ライフル（カービン）で参加するシューティングマッチの楽しさが何倍にもなった。操作手順やトリガータッチがより実銃に近い事。マグチェンジの際に「弾ポロ」もしない等、筆者にとってはガスブロの方が電動ガンよりもハマり込める要素が多かった。

M4＝AR愛好家の間には「M4沼」という言葉がある。実銃は現在、世界で最もバリエーションが多くカスタムパーツの種類も何千とあるテッポウ界の最大派閥！ トイガンの世界でもそれは同様で、M4＝ARを弄りだしたらもうキリがない、という意味らしい。筆者もそれにドップリ嵌り込んだ。

実銃を撃つため年に数回訪れるグアムでは16インチ銃身を使うので、ガスブロの愛銃にも長めのコンプとアダプターを装着。ハンドガードも細身でやや長めのフリーフロートに交換。さらに肘をタイトに畳んだ構えがし易いよう「マグプル／K2」や「BCMガンファイター」等の角度の立ったグリップ、より繊細なコントロールのためのストレート・トリガー、そして頬当てと肩付けを向上させるためのカスタムストックに、理想のスリング・ワークを求めてのQDアダプター等、M4A1 MWSのカスタマイズに決して多くはない小遣いをこの3年間でだいぶ注ぎ込みましたよ（笑）。なので昨2017年11月、東京マルイフェスタで発表された「MTR-16」には思わず脱力……しかし大感動、大感激だった。

考えうる限りのカスタマイズを施した「バリバリのレース仕様M4」降臨！

そして今、筆者はMTR-16を手にレンジに立っている。これはいわゆる「完パケの量産品」で、読者諸兄がこれからお店で手にするだろう物と全く変わらないハズなのだ。そして月に2～3度は自主トレを行なっている「エリオペ」を撃つ。かれこれ1時間半ほど、夢中になって撃ったが違和感全くなし。ライフルで撃つ6㎝プレートのパートは1発も外さなかった気がする。

MTR-16をちゃんと撃つのはこれが初めてだったが、これまで使っていたMWSの自作カスタムとほぼ同じ仕様なのだから当然といえば当然だった。

違いはただ一点。MTR-16は軽さが驚異的だ。ハンドガードやアウターバレルの肉抜きは決して伊達ではなく、わざわざこの銃を発売するタイミングでより軽い20連ショートマガジンを新造し、またマイクロプロサイトもセットして貸し出してくれた東京マルイの「強靭な意思」を感じさせた。

シューターなら真剣にならざるを得ない性能とスタイリング

MTR-16は紛う事なきメーカー純正フルハウスARレースガンなのだ。

サイトイン用として10m先に吊るした3㎝角のアルミ製ターゲットにもビシビシと面白いようにヒットする。巷では「0.25g BB弾としては最高品質」だとされ、筆者も過去の実験から強くそう思っている東京マルイ純正0.25gバイオBB弾との相性も抜群のようだった。

フロン134aを満タンにした20連マガジンは、ポケットで温めながらセミオートで撃つと3回転と数発＝約63～64発でガスが無くなった。この数字は毎回キッチリ同じで、つまりは1発毎のガス流量が安定している事の証明だろう。

この銃は今すぐにでも欲しい。APSカップ／ライフルクラスの2018年度チャンピオンである妻にも撃たせて意見を聞いてみたい。

このレポート用商品をこのまま買い取らせてもらえるかどうか?を、この原稿が書き終わったら東京マルイに打診するつもりだ。

あ！ いけね！ そういえば全然フルオートで撃ってないや（笑）！ この手の銃を手にするとついつい真剣に標的を狙ってしまうのは、やはりシューターの性（さが）なんでしょうねぇ……。